

# 幼児の関係性攻撃と社会的スキルに関する 短期縦断的研究

磯部 美良

(2002年9月30日受理)

A short-term longitudinal study of relational aggression and social skills of preschool children

Miyoshi Isobe

This short-term longitudinal study was designed to examine relational aggression associated with social skills and anxiety-withdrawn behavior of preschool children. Relational aggression, social skills (self-control skills, friendship making skills, and assertion skills), and anxiety-withdrawn behavior of one hundred and twenty 5-year old children were assessed two times across a 6-months period by using teacher rating measures. For the data analysis, the children were divided according to their first and second relational aggression scores into 4 groups: high-high, low-low, high-low, and low-high. The high-low group (i.e., composed of children who decreased the manifestation of relational aggression) increased self-control skills and decreased anxiety-withdrawn behavior. On the other hand, the low-high group (i.e., composed of children who increased the manifestation of relational aggression) relatively decreased self-control skills and increased anxiety-withdrawn behavior. These findings suggest that relational aggression and self-control skills are inversely related and point to the possibility that the teaching of self-control skills could contribute to the decrease of relational aggression. Furthermore, assessment of relational aggression may play an important role in the early detection of children's adjustment difficulties.

Key words: Relational aggression, Social skills, Anxiety-withdrawn behavior, Preschool children

キーワード：関係性攻撃，社会的スキル，不安・引っ込み思案行動，幼児

## 問 題

子どもの攻撃行動を対象としたこれまでの研究の多くは、身体的攻撃や言語的攻撃を主に扱ってきた。これら「外顯的攻撃 (overt aggression)」は、子どもの長期にわたる心理的・社会的不適応の重要な予測因であることが実証されている (Lockman & Wayland, 1994; Olweus, 1979)。しかしながら、これまでの研究は、男子のみを調査対象としているものが多く、そこで得られた知見が必ずしも女子では当てはまらないという限界があった (Crick & Grotpeter, 1995)。

こうした問題を背景に、最近、Crick とその共同研

究者は、外顯的攻撃とは異なる形態の「関係性攻撃 (relational aggression)」という概念を提唱した。Crick らによると、関係性攻撃は「仲間関係を操作することによって相手に危害を加えることを意図した攻撃行動」(Crick & Grotpeter, 1995) と定義される。そして、関係性攻撃は特に女兒に多く見られる攻撃形態であること、関係性攻撃を示す子どもは、外顯的攻撃を示す子どもと同様に、心理的・社会的不適応に陥っていることを報告している。

たとえば、Crick & Grotpeter (1995) は、関係性攻撃を示す児童は、抑うつ感や孤独感が高いことを示している。また、Crick & Grotpeter (1995) や Crick,

Casas, & Mosher (1997) は、関係性攻撃を示す幼児や児童ほど、仲間から拒否されていることを見出している。これらの研究から、関係性攻撃を示す子どもを早期に発見し、彼らに対して適切な介入的援助を施す必要性のあることが指摘される。

このことを踏まえて、磯部・佐藤（印刷中）は、関係性攻撃の低減を目指した社会的スキル訓練プログラムの開発の基礎資料を得ることを目的とし、関係性攻撃を顕著に示す幼児に特有な社会的スキルの問題について検討した。その結果、関係性攻撃を顕著に示す子どもは、関係性攻撃を示さない子どもに比べて、社会的スキルの中でも規律性スキルが有意に低いことを見出している。このことは、関係性攻撃を顕著に示す子どもは規律性スキルに欠けていること、そして、関係性攻撃は規律性スキルをターゲット・スキルとする社会的スキル訓練を実施することで低減される可能性のあることを示唆している。

さて、攻撃児に対する社会的スキル訓練のターゲット・スキルについて、佐藤・佐藤・相川・高山（1993）は、攻撃行動を低減させるためには、社会的スキルの中でも、特に攻撃行動と拮抗するスキルを訓練のターゲット・スキルとして選択する必要があることを指摘している。ここで言う「攻撃行動と拮抗するスキル」とは、攻撃行動と同時に出現させることのできないスキルのことを意味する。実際、佐藤ら（1993）は、ターゲット・スキルとして「ルールの遵守」と「適切なやり取り」を選択し、これらの行動が習得され実行されることによって成立する「協調的遊び行動」を効果判定の指標とした。その結果、訓練対象児は、訓練の開始とともに攻撃行動や妨害的行動を減少させ、逆に「協調的遊び行動」を急激に増加させていた。この結果は、攻撃行動にターゲット・スキルが置き換わったことを示している。すなわち、攻撃行動とターゲット・スキルが正確に対応した関係であったために、このような訓練効果が得られたものと考えられる。

佐藤ら（1993）の研究に基づく、上述した磯部・佐藤（印刷中）の研究には、次のような限界が指摘できる。すなわち、彼らの研究は、社会的スキルと関係性攻撃を同時期に測定したものであるから、社会的スキルと関係性攻撃の間に、一方が増加すると他方が減少するというような対応関係があるのかどうかを知ることができない。このことを明らかにするためには、関係性攻撃と社会的スキルの関係を縦断的に調べる必要がある。そこで本研究では、幼稚園年中児と年長児の両時点において社会的スキルと関係性攻撃の教師評定を実施し、関係性攻撃と社会的スキルの関係を縦断的に検討することを第1の目的とする。

ところで、関係性攻撃を示す子どもが適応の問題を抱えていることは既に述べた。しかしながら、関係性攻撃を示す幼児の適応問題について検討している研究は数少なく、特に縦断的研究の必要性が指摘されている（Crick, et al. 1997）。そこで本研究では、適応の指標として不安・引込み思案行動を取り上げ、関係性攻撃との関連について検討することを第2の目的とする。

さらに、関係性攻撃の安定性について検討することを第3の目的とする。5歳児における関係性攻撃の1ヶ月間の安定性を調べたCrick, Casas, & Ku (1999) は、.61の安定性係数を得たことから、関係性攻撃は幼児期においてもかなり一貫した個人の行動レパトリーになっているのではないかと考察している。しかしながら、Crick et al. (1999) の研究は期間が1ヶ月と短く、また被験者も26名と非常に少ない。そこで本研究では、期間を半年間に拡大するとともに被験者の数を多くして、関係性攻撃の安定性を検討する。

## 方法

### 対象児と評定者

年中から年長へと進級し、年中児時点（1回目）と年長児時点（2回目）の調査データが揃っている幼児120名（男児71名、女児49名）を対象とした。2回目の調査時点における彼らの平均年齢は、5歳11ヶ月であった。

なお、本調査の対象児は、7つの幼稚園および保育所に所属する幼児たちである。年中児時点では10クラスであったが、年長へ進級する際、クラス再編のため11クラスに分かれた（同じ保育園内の2クラスは再編成され、また別の保育園の1クラスは2つのクラスに分割された）。そのため、担当クラスの幼児の行動評定を依頼した保育者は、年中児時点では10名、年長児時点では11名となった。また、クラス再編の行われた3つのクラスに所属する幼児は、全体の47.5%（57名）に相当した。

### 測定尺度

#### (1) 関係性攻撃の尺度

Crick et al. (1997) の Preschool Social Behavior Scale-Teacher Form より、関係性攻撃5項目を翻訳して用いた（資料1）。回答は、各項目について「全くあてはまらない（1点）」「あまりあてはまらない（2点）」「少しあてはまる（3点）」「わりにあてはまる（4点）」「非常にあてはまる（5点）」の5段階評定で求めた。調査時点ごとに $\alpha$ 係数を算出したところ、1回目

は.94, 2回目は.93であり十分な信頼性が得られた。そこで5項目の得点を合計して関係性攻撃尺度として使用した。

### (2) 社会的スキルの尺度

磯部・佐藤(投稿中)より, 規律性スキル7項目, 友情形成スキル5項目, 主張性スキル4項目を使用した(資料2)。回答は, 各項目について「全くみられない(1点)」「少しみられる(2点)」「ときどきみられる(3点)」「よくみられる(4点)」「非常によくみられる(5点)」の5段階評定で求めた。調査時点ごとに各因子の $\alpha$ 係数を算出したところ, 1回目では, 規律性スキルが.84, 友情形成スキルが.92, 主張性スキルが.75, 2回目では, 規律性スキルが.87, 友情形成スキルが.83, 主張性スキルが.82であり, 十分な値を示していた。そこで, 各因子の項目数が異なることを考慮し, 各因子を構成する1項目あたりの平均評定値をそれぞれの下位尺度得点として使用した。

### (3) 不安・引っ込み思案行動の尺度

渡邊・岡安・佐藤(1999)より, 不安・引っ込み思案行動6項目を使用した(資料3)。回答は, 各項目について「全くみられない(1点)」「少しみられる(2点)」「ときどきみられる(3点)」「よくみられる(4点)」「非常によくみられる(5点)」の5段階評定で求めた。 $\alpha$ 係数を算出したところ, いずれの調査時点でも.84であり, 十分な信頼性が確認された。そこで1項目あたりの平均評定値を算出し, 不安・引っ込み思案行動尺度得点として使用した。

#### 調査の時期と方法

1回目の調査は, 2000年1月上旬に質問紙を配布し, 2月下旬に回収した。2回目の調査は, 2000年7月下旬に質問紙を配布し, 9月下旬に回収した。いずれの時点でも, 保育者は約1週間で質問紙に回答している。その際, 保育者には, 「各項目をよく読んで, 過去1~

2ヶ月間の子どもの行動について思い出して評定して下さい」と教示した。

## 結果

### 関係性攻撃の安定性

関係性攻撃の約半年間にわたる安定性を見るために, 1回目と2回目の関係性攻撃得点の安定性係数を算出した。相関分析の結果, 全対象児では $r=.36$  ( $p<.001$ )という値が得られた。ところが, 男女別に見ると, 男児では $r=.44$  ( $p<.01$ ), 女児では $r=.23$  ( $n.s.$ )というように, 性別によって安定性の高さが異なることが示された。

次に, 関係性攻撃の変動のパターンを調べるため, 1回目と2回目の関係性攻撃得点に基づいて, クラスター分析を行った。その結果, 4クラスターによる分類が関係性攻撃の変動のパターンを見る上で最も妥当であると考えられた。

FIGURE 1は, 1回目と2回目の関係性攻撃得点に対するクラスター中心の値を, クラスターごとに図示したものである。各クラスターにおける関係性攻撃得点の変動パターンに従い, 第1クラスター(1回目と2回目がともに高得点である群)を高維持群, 第2クラスター(1回目から2回目にかけて得点が増加している群)を上昇群, 第3クラスター(1回目と2回目がともに低得点である群)を低維持群, 第4クラスター(1回目から2回目にかけて得点が減少している群)を下降群と命名した。以後, これら4つの関係性攻撃の変動パターンの類型を群と表記する。

なお, 各群の構成人数は, 高維持群は14名(男児12名, 女児2名), 上昇群は20名(男児18名, 女児2名), 低維持群は64名(男児34名, 女児30名), 下降群は22名(男児7名, 女児15名)であった。

TABLE 1. 群別の社会的スキルと不安・引っ込み思案行動の平均値(M)および標準偏差(SD)

群		社会的スキル						不安・引っ込み思案行動	
		規律性スキル		友情形成スキル		主張性スキル		1回目	2回目
		1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目		
高維持群	M	2.82	3.36	4.04	3.97	3.09	3.29	1.80	2.14
	SD	(0.88)	(0.89)	(0.67)	(0.96)	(0.77)	(1.01)	(0.57)	(0.42)
上昇群	M	3.24	3.07	3.21	3.54	2.54	2.74	1.58	2.01
	SD	(0.65)	(0.76)	(0.83)	(0.89)	(0.56)	(0.78)	(0.83)	(0.71)
低維持群	M	3.64	3.69	3.28	3.78	2.47	2.84	1.68	1.79
	SD	(0.71)	(0.68)	(0.82)	(0.89)	(0.82)	(0.90)	(0.79)	(0.76)
下降群	M	3.13	3.87	3.62	4.13	3.07	3.47	2.22	1.64
	SD	(0.65)	(0.42)	(0.58)	(0.81)	(0.53)	(0.69)	(0.58)	(0.57)

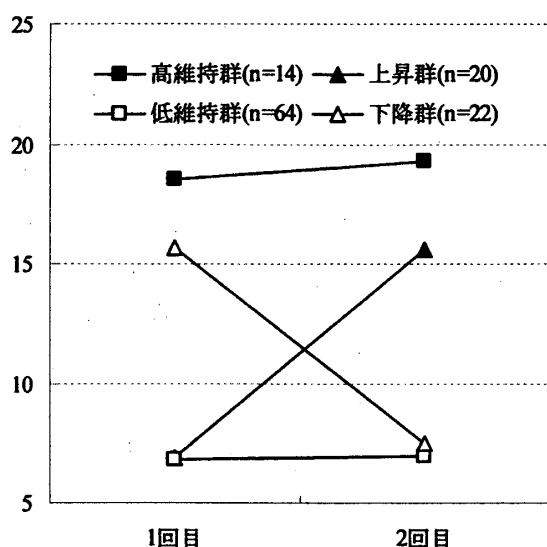


FIGURE 1. 関係性攻撃得点に基づくクラスター分析の結果

#### 関係性攻撃の変動パターンと社会的スキルの関係

##### (1) 社会的スキル下位尺度得点の群比較

関係性攻撃の変動パターンが社会的スキルの変化に違いを生み出すかどうかを検討するために、社会的スキル下位尺度ごとに、4 (群) × 2 (調査時期) の2要因分散分析を行った。なお、本研究の多重比較には、全てRyan法 ( $p < .05$ ) を用いた。

規律性スキルでは、調査時期の主効果 [ $F(1, 116) = 17.52, p < .001$ ] と群の主効果 [ $F(3, 116) = 4.24, p < .01$ ] がそれぞれ有意となった。また交互作用が有意となったため [ $F(3, 116) = 9.20, p < .001$ ]、単純主効果の検定を行った。その結果、群の単純主効果は、1回目と2回目のそれぞれにおいて有意となった〔1回目:  $F(3, 232) = 5.09, p < .01$ ; 2回目:  $F(3, 232) = 5.47, p < .01$ 〕。1回目では低維持群が他群よりも高かったが、2回目では低維持群と下降群が上昇群よりも高く、また下降群は高維持群よりも高かった。調査時期の単純主効果は、下降群と高維持群において有意となり〔下降群:  $F(1, 116) = 28.41, p < .001$ ; 高維持群:  $F(1, 116) = 15.20, p < .001$ 〕、どちらの群も1回目から2回目にかけて増加していた。TABLE 1を見ると、下降群の得点は1回目から2回目にかけて増加しているが、上昇群の得点は有意差を示さず、しかも2回目時点では高維持群を除いた他群よりも得点が高い。また高維持群の得点も増加しているが、2回目でも下降群の得点より低いことが分かる。

友情形成スキルでは、調査時期の主効果 [ $F(1, 116) = 14.10, p < .001$ ] と群の主効果 [ $F(3, 116) = 3.46, p < .05$ ] がそれぞれ有意となった。また、交互作用 [ $F(3, 116) =$

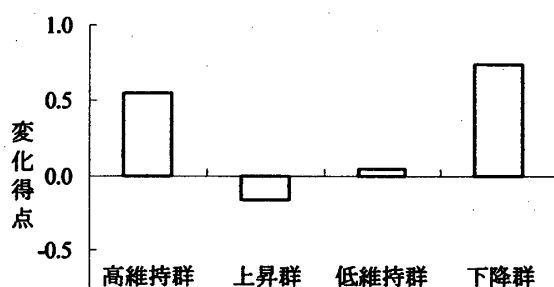


FIGURE 2. 規律性スキルの変化得点

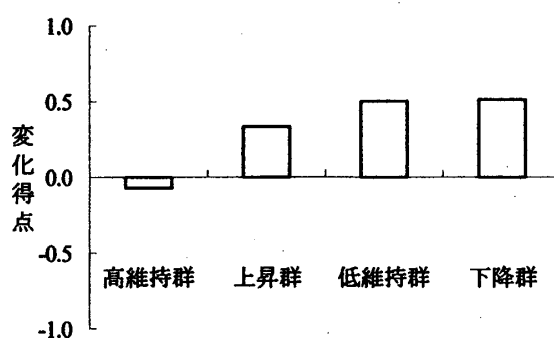


FIGURE 3. 友情形成スキルの変化得点

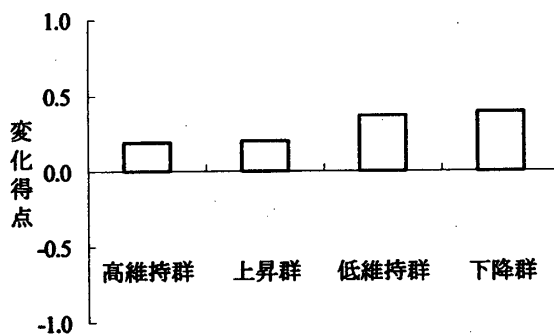


FIGURE 4. 主張性スキルの変化得点

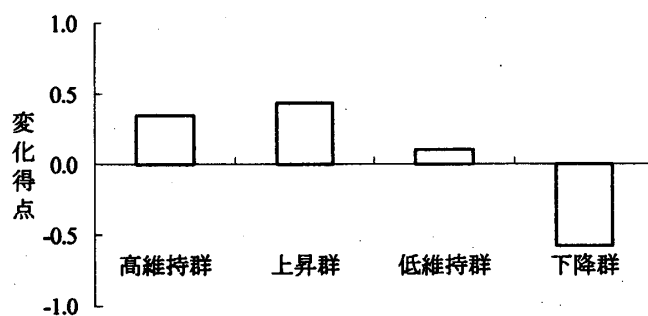


FIGURE 5. 不安・引っ込み思案行動の変化得点

2.59,  $p=.06$ ) が有意傾向となったので、単純主効果の検定を行った。その結果、群の単純主効果は1回目のみが有意となり [ $F(3, 232)=4.53, p<.001$ ]、高維持群が上昇群と低維持群より高い得点を示した。また、調査時期の単純主効果は、高維持群以外の全ての群において有意あるいは有意傾向となった〔上昇群： $F(1, 116)=3.82, p=.06$ ; 低維持群： $F(1, 116)=8.77, p<.01$ ; 下降群  $F(1, 116)=9.10, p<.01$ ]。TABLE 1 から明らかのように、高維持群の得点が横ばい状態であった以外は、いずれの群の得点も1回目から2回目にかけて増加していた。

主張性スキルでは、群の主効果 [ $F(3, 116)=5.11, p<.001$ ] が有意となり、下降群と高維持群が他群より高い得点を示した。また調査時期の主効果 [ $F(1, 116)=11.15, p<.001$ ] も有意となった。TABLE 1 に示したように、全ての群の得点が1回目から2回目にかけて増加していることが分かる。

## (2) 社会的スキルの変化得点の群比較

社会的スキルの変化の程度の群比較に先立ち、社会的スキルの下位尺度ごとに2回目目の得点から1回目の得点を減算して、社会的スキルの変化得点を算出した。FIGURE 2, 3, 4 は、各群の変化得点の平均値を示したものである。高い値ほど社会的スキル得点が増加したことを意味する。次に群を独立変数、社会的スキルの各変化得点を従属変数とした1要因の分散分析を行った。

その結果、規律性スキルにおいて群の主効果が有意となり [ $F(3, 116)=9.72, p<.001$ ]、下降群と高維持群が他群に比べて高い得点を示した。また、友情形成スキルでは群の主効果が有意傾向となり [ $F(3, 116)=2.19, p=.09$ ]、低維持群と下降群が高維持群よりも高い得点を示した。主張性スキルでは、有意な群間差は見られなかった。

## 関係性攻撃の変動パターンと不安・引込み思案行動の関係

### (1) 不安・引込み思案行動得点の群比較

不安・引込み思案行動得点について、4(群)×2(調査時期)の2要因分散分析を行ったところ、交互作用が有意となったため [ $F(3, 116)=9.44, p<.001$ ]、単純主効果の検定を行った。その結果、群の単純主効果は、1回目と2回目において有意あるいは有意傾向となった〔1回目： $F(3, 232)=3.33, p<.05$ ; 2回目： $F(3, 232)=2.12, p=.10$ ]。1回目では下降群が他群よりも高かったが(高維持群のみ有意傾向： $p=.09$ )、2回目では高維持群と上昇群( $p=.10$ )が下降群よりも高く、また高維持群( $p=.10$ )は低維持群よりも高

い傾向が示された。調査時期の単純主効果は、低維持群以外の全ての群において有意となった〔高維持群： $F(1, 116)=5.30, p<.05$ ; 上昇群： $F(1, 116)=8.30, p<.01$ ; 下降群： $F(1, 116)=15.19, p<.001$ ]。TABLE 1 に示したように、下降群の得点は1回目から2回目にかけて減少しているのに対し、高維持群と上昇群の得点は増加しているのが分かる。

### (2) 不安・引込み思案行動の変化得点の群比較

社会的スキル変化得点と同様の手続きを用いて、不安・引込み思案行動の変化得点を算出した。群を独立変数とし、不安・引込み思案行動の変化得点を従属変数とした1要因の分散分析を行った。その結果、群の主効果が有意となった〔 $F(3, 116)=8.88, p<.001$ ]。FIGURE 5 から明らかのように、下降群が他群よりも低く、また低維持群が上昇群よりも低い傾向( $p=.07$ )が示された。

## 考 察

まず、社会的スキルと関係性攻撃の変動パターンの関係について考察する。本研究の結果、下降群は1回目時点から2回目時点にかけて規律性スキルを一層高く表出するようになったのに対し、上昇群は規律性スキルの表出レベルに変化を見せず、しかも2回目時点では高維持群を除いた他の2群よりも相対的に低い得点を示していた。これに対して、友情形成スキルと主張性スキルの変化の仕方やその程度については、4群間でほぼ違いが見られなかった。これらの結果から、関係性攻撃と対応関係にある社会的スキルは、規律性スキルであることが指摘される。

つまり、関係性攻撃を示さなくなった子どもは、「仲間とのいざこざ場面で、自分の気持ちをコントロールすることや「人とゲームしているときにルールに従う」ことなど、規律性スキルを獲得していた。逆に、関係性攻撃を高く示すようになった子どもは、規律性スキルを同年齢の子どもと同程度には発達させず、むしろ相対的に低下させていたと言える。なお、高維持群は、下降群と同じように規律性スキルを1回目時点から2回目時点にかけて高く示すようになっていたが、2回目時点でも下降群より有意に低い得点を示していた。以上の結果から、関係性攻撃は、規律性スキルを習得することで低減されると推測できる。

次に、不安・引込み思案行動の結果を見ると、下降群は不安・引込み思案行動を減少させていたが、上昇群は不安・引込み思案行動を増加させていた。下降群の子どもは関係性攻撃を示さなくなり、社会的スキルも獲得したので、仲間関係において孤立したり

不安を示したりすることが少なくなったのであろう。これに対して、上昇群の子どもは関係性攻撃を高く示すようになり、社会的スキルも相対的に低いために仲間から敬遠され、不安・引っ込み思案行動を増加させたものと考えられる。これらの結果から、関係性攻撃と不安・引っ込み思案行動は密接な関係にあり、関係性攻撃は幼児の社会的不適応の重要な予測因となる可能性が示唆される。

ところで、高維持群は、規律性スキルをある程度獲得し、友情形成スキルや主張性スキルを持続して高く示していたにも関わらず、不安・引っ込み思案行動を増加させていた。このことは、たとえこれらのスキルが比較的優れていたとしても、関係性攻撃を持続させていたことの累積的影響によって、仲間からの孤立や不安が一層高くなったものと考えられる。関係性攻撃を示す児童に抑うつ感や孤独感が高いことを見出したCrick & Grotpeter (1995) は、その理由の1つとして、関係性攻撃が仲間関係の範囲を潜在的に狭める行為であることを指摘している（たとえば、ある子どもをグループから排斥することによって、結果的に遊び友達が少なくなるなど）。本研究の結果は、この指摘が幼児にも当てはまることを示しており、関係性攻撃を持続させることで、幼児でも次第に仲間からの孤立を高めていく可能性があることを示唆していると言える。

最後に、関係性攻撃の安定性について考察する。相関分析の結果、幼児の関係性攻撃は半年間を経ても、ある程度安定していることが明らかになった。しかしながら、男女別に見ると、有意な正相関は男児においてのみ得られた。また、クラスター分析の結果、高維持群や上昇群に分類される幼児の大多数は男児であった。一方、女児は下降群に分類される人数が多く、高維持群や上昇群にはそれぞれ2名しか該当しなかった。本研究の調査期間が約半年間と比較的長期にわたるものであったこと、および対象児の半数近くが年中児から年長児に上がる際にクラス編成を経験していることを考慮すると、男児の関係性攻撃は、比較的安定したものであることが示されたと言えよう。これに対して、女児の関係性攻撃は変動しやすいことが示唆される。こうした性差が何を反映するものなのか、残念ながら本研究計画では明らかにされない。これまで見てきたように、女児の関係性攻撃が男児に比べてより早く適切な社会的スキルに置き換わったことによるものなのか、それとも、何か別の要因が関わっているのかを明らかにする研究が求められる。

以上、本研究においても関係性攻撃と密接な関わりを持つ社会的スキルは規律性スキルであることが確認された。また、関係性攻撃を持続させることで、幼

期の子どもの社会的適応が悪化する可能性も示唆された。これらのことから、関係性攻撃を頻繁に示す幼児に対して、規律性スキルの習得に焦点を当てた予防的介入が必要であると言える。それと同時に、関係性攻撃の安定性に関しても、より長期的な縦断研究を実施することで更に検討していくことが求められる。

## 【引用文献】

- Crick, N. R., Casas, J. F., & Ku, H. 1999 Relational and physical forms of peer victimization in preschool. *Developmental Psychology*, **35**, 376-385.
- Crick, N. R., Casas, J., & Mosher, M. 1997 Relational and overt aggression in preschool. *Developmental Psychology*, **33**, 579-588.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. 1995 Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, **66**, 710-722.
- 磯部美良・佐藤正二 印刷中 幼児の関係性攻撃と社会的スキル 教育心理学研究
- Lochman, J. E., & Wayland, K. K. 1994 Aggression, social acceptance, and race as predictors of negative adolescent outcomes. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, **33**, 1026-1035.
- Olweus, D. 1979 Stability of aggressive behavior patterns in males: A review. *Psychological Bulletin*, **86**, 852-875.
- 佐藤正二・佐藤容子・相川 充・高山 巖 1993 攻撃的な幼児に対する社会的スキル訓練 コーチング法の適用による訓練効果の維持 行動療法研究, **19**, 20-31.
- 渡邊朋子・岡安孝弘・佐藤正二 1999 幼児用社会的スキル尺度の標準化に関する研究 日本行動療法学会第25回大会発表論文集, 104-105.

### 資料1 関係性攻撃尺度の項目

1. 他の子に「○○ちゃんと遊ばないように」とか「○○ちゃんと友達にならないように」という、2. 「私/僕の言うことを聞かないと仲間はずれにしてやる」と言葉で脅す、3. 他の子たちにある子を嫌いにならせる、4. 仲間に「あなたとは遊ばない」とか「私/僕の言うとおりにすればあなたと友達になってあげる」という、5. ある子に腹を立てるとその子を仲間はずれにする。

### 資料2 社会的スキル尺度の項目

- 規律性スキル 1. 教師の指示に従う、2. 仲間とのいざ

こぎ場面で、自分の気持ちをコントロールする、3.人とゲームしているときにルールに従う、4.園にある遊具や教材を片付ける、5.批判されても気分を害さないで気持ちよくそれを受ける、6.ゲームなどの活動中に、自分の順番を待つことが出来る、7.大人とのいざこざ場面で、自分の気持ちをコントロールする。

**友情形成スキル** 1.友達をいろいろな活動に誘う、2.自分から仲間との会話を仕掛ける、3.ゲームや集団活動に参加する、4.教室での活動に自分から進んで仲間の手伝いをする、5.自由時間の過ごし方が適切である。

**主張性スキル** 1.適切な場面で自分のよいところを言

える、2.指示しなくても初めて会う人に自分から自己紹介する、3.言われなくても教師の手伝いをする、4.仲間に意地悪されても適切に応答する。

### 資料3 不安・引っ込み思案行動尺度の項目

1.さびしそうにしている、2.他の子達と一緒にいるとき不安そうである、3.悲しそうであったり、ふさぎ込んだりする、4.遊び仲間選ばれない、5.仲間との遊びに参加しない、6.一人遊びをする。

(主任指導教官 松田文子)